

高橋治夫著「グローバル企業の経営倫理」

世界経済評論 2010年3・4月号、社団法人世界経済研究会刊を読む

1. 20世紀の企業人格は企業を核にした社会活動への遠心的拡大である。ここでの社会規範は企業を核にした人々の営み、常識が社会の基本的価値を形成してきた時代である。20世紀は機材文明が発展し、工業化社会の形成によって多くの国は経済発展を遂げた。工業化社会の担い手となった企業活動は社会的価値を形成する主要な要因となった。企業活動が優先することによる法律や倫理の基本にあるものは工業化社会を目指す価値尺度であり、社会の常識はそのことが底流にあったことは否めない。
2. しかし、21世紀の企業人格はどうであろうか。ここでは企業を囲む常識、倫理、法律などの外側の社会規範が強くなり、影響力が大きくなっている。しかし、間違っていないことは企業自体の経営活動が弱くなったということではなくその質的性格である行動規範が変わってきているということである。ここでは企業を囲む社会の常識、倫理、法律が進化し、企業に対する見方が厳しくなっている。ここから言えることは、今日は企業は先ず現代の企業の常識、倫理、法律は何かということをしっかり認識した上で経営活動を行わなければならない。CSRは企業活動の一部ではなく企業全体の基本の行動として現代の社会に問いかけている。今日の経営は現代の企業の常識は何かという全体認識の上で企業活動を考えることである。つまり、企業活動のあり方を全体最適にするために部分最適として企業が何ができるかという演繹的発想が必要なのである。
3. この意味からすればわれわれはその変革の潮流にあり、リン・シャープ・ペインの著書のタイトル『バリューシフト 企業倫理の新時代』(鈴木主税、塩原通緒、毎日新聞社) "Value Shift", by Lynn Sharp Paine, The McGraw-Hill Company Inc.2003 が参考になる。

P.64

[コメント]

グローバル企業のバリューシフトとは何かを問う白鷗大学教授で日本経営倫理学会会長の高橋治夫先生のお考えは示唆に富む。

- 2010年3月11日 林明夫記 -